

広島は捕虜 10 人～ 23 人は被爆死し、呉海軍の捕虜 28 人は全員帰国した。

吉田 ^{たかよし} 巍彦

1. 1945 年米陸海空軍の呉海軍監獄の情報について

1945 年 2 月、ワシントンの「標的評価統合集団」は、「呉海軍監獄は、『焼夷弾に一番弱い地帯』（NO. 1 ファイヤー・ゾーン）に近い人口密度が異常に高い地点にある」と総括した。なぜか、爆撃の標的として最適だといわんばかりに監獄の写真まで添付しているが、捕虜についての言及はまだない（標的評価統合集団、空襲目標ファイル、1945 年）。

一方、米兵捕虜について、広島憲兵隊司令部の資料は原爆で焼滅し、呉鎮守府の関連資料も、7 月 1 日の爆撃で焼失したと考えられていた。

2. 呉工廠に連合軍捕虜 2000 人の情報

1945 年 6 月 12 日、ニミッツ本土上陸総司令官は、「呉海軍工廠に、2000 人の連合軍捕虜が働いているとの情報あり」と全軍に通達（ブレットイン No. 104）した。B-29 写真偵察隊が 4 月 12 日に撮影した工廠の写真が添えられていたが、6 月 22 日の 195 機の B-29 による工廠爆撃は通達にはおこまいなしであった。80%の建物が壊滅した。もっとも、敗戦後、10 月 7 日に呉に進駐した米 6 軍・41 師・10 軍団は 17 日に、2000 人の捕虜の情報は「矛盾が多い」ことを認めた（軍団占領日報による）。

3. 広島中国新聞 検閲開始か

これより先、10 月 11 日、当時まだ 41 師団のヤドカリの身であった、その後日本の全ての情報執行役になる『民間検閲支隊』は、焼土の広島で、中国新聞の社長 山本実一氏を直撃した。原爆で印刷機をやられた同社がコンニャク版で市内に掲示した壁新聞の『特報』の残っていた全量を押収するためだった。その日同社は、「今後出版予定の新聞五部を 186 連隊を通じて、最も迅速な方法で師団司令部に届けるように」と厳命された（41 師占領日報 p37. 38）。同社の『55 年社史』と『80 年社史』はこれに触れていない。わずかに、御田重宝氏の『もう一つのヒロシマ』（1985 年版）が「米軍の中尉、大尉が来て、作業の打合せがあった」と記録する。だが、軍団と 41 師の『占領日報』によれば、これは「作業の打合せ」ではなく、検閲の開始であった。以後、他社の例（『朝日新聞社史』1994 年）に見られるような自己規制が効いたのか、同社の国内外にたいする原爆や平和祭などの特集の発信は、系列紙『夕刊ひろしま』1946 年 7 月 6 日号と 1948 年 8 月 6 日号以外に目立つものは見られない。

4. 英連邦占領軍の日刊紙は平和祭の記事を世界に発信したが、広島・呉の捕虜の情報はオフリミット

これは、英連邦占領軍 BCOF（ビーコフ）の日刊紙『BCON』（ビーコン）が 1948 年 8 月 7 日に、広島平和祭を特集して、全ページ 3 枚を世界に発信したのと対照的だ。BCON は、平和祭の 3 日だけは『対敵諜報部隊』（CIC）も記事を規制しない（Monica Braw の『Atom Bomb Suppressed』1988 年）のをもつきの幸いと一大キャンペーンを張ったと考えられる。平和祭の当日、BCOF のロバートソン司令官は、記念樹の「くすの木」を早朝さつ

さと植えて広島市を困らせたが、その後、ひな壇で「原爆は、米英を裏切った日本人への天罰だった」と爆弾発言をした。これは、占領政策の緩和を打出したばかりのマッカーサーの大ひんしゅくを買ったが、ロバートソンはどこ吹く風だった。呉の官舎（現入船山記念館）に帰って、発言の真意は「原爆を地震や天災と同じように考えている日本人に警告したのだ」と語っている（フランク・クルーン『The Ashes of Hiroshima』1950年）。

あれから60年、この「警告」や「くすの木」の後日談はまたの機会に譲るしかない。ただ、米8軍の支配下にあったBCONは、原爆や核関連のニュースはかなり自由に流したが（筆者の調査では3年間に250回以上の記事）、コト広島と呉の英米の捕虜に関する情報には1回も触れていない。捕虜関連の報道規制は占領軍内でも厳しかったようだ。

5. 広島捕虜についての噂は「百鬼夜行の如く」渦巻いた

その一方、米兵捕虜の虐殺や捕虜が被爆死したという情報は、広島では当初から噂になって流れていたという。渦巻いて流れる噂は疑惑を広げるしかない。広島総軍の生き残りの一人 宍戸幸輔氏は「その後のアメリカにたいする激しい怨恨のせいもあって、大部分の噂はほとんど事実と反したものと断定できる」。「被爆捕虜についての疑惑が広島原爆死（ママ）のなかに百鬼夜行の如く渦巻いている」と『広島原爆の問題点』（1991年）に書いた。これは、広島国立原爆犠牲者祈念館に他の一冊とともに体験記として陳列されている。同氏の体験談はポストン・グローブ紙（1975年11月3日）発表の広島捕虜 被爆死10人説を中心に展開している。

6. 1970年、「ゼニモト、おめでとう！これは歴史に残るキャンペーンだ」

ノーマン・カズン氏の祝電が広島毎日に届いた

戦後四半世紀にわたる「百鬼夜行」の噂の渦の中から1970年7月10日、毎日新聞 銭本三千年氏の「広島原爆——2米兵も死んでいた」の特ダネが広島から発信され、UPIによって世界に流された。原爆記者銭本氏は10年にわたる取材の結果、呉で被弾、広島で被爆死した米兵2人の名前を始めて探し出したのだ。米国防総省は直ちに「何も知らない」とコメントしたが、UPIの追求にたいして、被爆死は認めないが、4人のB-24の広島捕虜が戦死したとその名前を初めて公表した。『サタデイレビュー』の編集長の祝電は、国防総省を遂に動かした広島の特ダネにたいする敬意だった（毎日新聞130年史2002年版の囲み記事による。同社100年史1972年版にはなかったもの）。

7. 1976年、広島大原医研 宇吹暁氏 米捕虜被爆者20人の英文名簿（外交文書）を発見

宇吹 暁氏は30年間のマル秘扱いから解除されたばかりの被爆米兵捕虜20人の英文名簿（外交文書）を発見した。被爆した米兵捕虜がいたことを、これは世界に初めて知らせる画期的なもので、米国では名簿の遺族に大反響を呼んだ。日本では、その後9人は九大生体実験の被害者を被爆者に旧軍がすりかえていたことが発覚した。その他は呉の『榛名』や『利根』を攻撃したB-24 2機や空母『タイコンデロガ』機の乗組員であった。

『ロンサムレディ』（B-24）のパイロット カートライトが含まれていたが『タロア』のパイロット ダビンスキー中尉がなく、空母『ランドルフ』機のパイロット ジョセフ・ダビンスキー少尉になっていた。後で、これは陸軍省を引継いだ第一復員局の誤報告だとGHQは気付いて、被爆死したのは『ランドルフ』機のパイロット ジョセフ・ハンシェル少尉（『呉戦災』と石井 勉『アメリカ機動部隊』1988年p 397を参照）だとした。

この問題は広島に被爆米兵研究家の間では今も未解決のまま。だが、『タロア』のダビンスキーは、遺族の了解をとった森 重昭氏によって、その後遺影を国立祈念館に登録された。

これをきっかけに、憲兵隊生き残りの准尉 2 人が証言者として現われた。一人 (柳田博氏) は、「憲兵隊司令部の廃虚から被爆死米兵の認識票 23 ケを占領軍が持ち去るのを見た」、また「米兵には女性も含まれていた」と証言した (広島市『原爆戦災史』1971 年)。丸木位里・俊夫妻の『原爆の凶、米兵捕虜の死』(1989 年)はこの証言から生まれた。

もう一人 (藤田明孝氏) は、米兵の認識票 20 ケは、自分が廃虚の金庫を蹴り開け、占領軍に渡したものだと言明した (中国新聞 1978 年 1 月 28 日)。NHK 広島某の依頼で矛盾をはらんだこの証言者 2 人を取材した穴戸幸輔氏 (前出) は、二人共、認識票の持主の名前は知らなかったことを確認したという (前出体験記, 1991 年)。

8. 1978 年の原爆忌前 中国新聞と英文毎日「被爆米兵 23 人の行方」を総括

1978 年 8 月 3 / 4 日、中国新聞は「被爆米兵の行方」を特集した。小見出しの「つかめぬ実数」が示すように、被爆米兵の情報がまだ限られたものであったが、8 年前の銭本スクープ後の原爆記者たちによる取材のすぐれた総括と言えよう。

『The Mainichi Daily News(英文毎日)』も、「広島に悲劇に米兵 23 人」の特集を組んで (8 月 3 日) 海外に発信した。米兵の遺族から早速反応があった。両紙の特集の結びは、言い合わせたように、原爆の惨禍の前には、「加害者」だと思っていた米人も「被害者」であったという『原爆の凶』を携えてアメリカを巡回した丸木夫妻のメッセージが引用された。被災米兵の真相については、生き残った二人 カーライト氏とエーベル氏の証言がキイになるだろうと同意見であった。

9. 呉監獄の米兵捕虜 28 人は、戦後、全員無事帰国した。

ワシントンの「標的評価統合集団」(前出)は「呉の監獄には撃墜されたが生き残った米兵捕虜が拘束されていたことと、全員 (ママ)7 月 1 / 2 日の B-29 の空襲も生き延びて戦後帰国した」ことを早くから把握していた (前出 空襲目標ファイル)。だが、このマル秘扱いが解除されたのは 30 年後 (1975 年頃) であった。

一方、呉鎮守府の米兵捕虜に関する資料は、戦後焼却され、中国新聞『呉空襲記』(1975 年)の黒永 忠氏の記憶による「呉海兵団収容捕虜 45 人説」が唯一の情報と考えられていた。

呉監獄付近の住民も、監獄の裏山の松の木で囚人が首をつったのをたびたび見ているのには誰一人気づかなかった (付近に住んだ勤労学徒 平賀保世氏の談)。

2000 年 7 月に、福林 徹氏は、戦災を記録する会の神戸大会で、「アメリカ兵 27 人は呉海軍基地から大船海軍捕虜収容所へ送られ、終戦後アメリカへ帰還」と報告した。貴重な報告であったが、「海軍基地」の捕虜収容場所が呉監獄であったとは特定されていなかった。

同年 9 月、3 月 19 日早朝、二番手として呉湾を攻撃した『ホーネット』機の捕虜二人の当日の写真が 55 年振りに江田島で見えられた。翌年 2 月、筆者から母艦『ホーネット』の「戦闘報告」のファイルコピーを送られた捕虜の一人から返礼の E メールが届いた:「海軍の監獄で、同室の牢名主格の囚人にメシを取り上げられた。巡回の看守にそれを訊ねられたとき、『その様なことはない』とワルをかばったため、それ以降、彼とフレンドになった」という。戦後 55 年、初めて、少なくとも 3 人の『ホーネット』機の捕虜が海軍監獄に海

軍の囚人と一緒に収監されていた事実と、メシは捕虜の方が海軍の囚人より少し良かったらしいという監獄生活の一端が明らかになった。ただ、筆者が送った『ホーネット』のミッシングレポートによって、攻撃したのが『大和』でなく『伊勢』だと知って彼は失望し、彼の情報の提供はそれまでだった。『大和』は、彼にとっても55年間日本海軍のシンボルだったのだ。

10. 呉海軍監獄の資料

その後、「呉監獄の捕虜の取扱い」に関する詳細な報告が、監獄副長から占領軍に敗戦直後、報告されていたことが判明した。監獄は、3月19日以降、捕虜情報の重要性に注目した鎮守府と大船捕虜収容所の管理下にあり、広島憲兵隊司令部の管轄地以外の捕虜が収容されていた。報告には、3月19日～7月末間に拘束されていた捕虜28人の名前、入所日、拘留期間の記録名簿が添付されていた。母艦名、隊名、階級、撃墜日などの明細はなかったが、広島捕虜の宇吹資料に匹敵する呉海軍捕虜の資料であった。

筆者が入手していたものは、唯一頼りのカナ書きの名前が不鮮明で、最初判読が困難であった。幸い、その後収集した空母の「ミッシングレポート」やパイロットの「戦闘報告」などを手掛りに、27人の名前がなんとか解読できるようになった。ただ、28人目のウィリアム某は、名前のカナ文字が一部欠落しているため、William L.Landrethか、L.Landerかの英字名の推定がまだ出来ていない。

11. 『Genda's Blade』と『源田の剣』

2003年に入って、ヘンリー境田・高木晃治両氏による『Genda's Blade』と『源田の剣』がロンドンと東京で相ついで出版された。『Genda's Blade』に、「第343海軍航空隊」、『源田の剣』に「米軍が見た『紫電改』戦闘機隊」とついた副題が示すように、3月から7月末にかけて、関西以西に来襲した米艦載機とこれを迎撃した『紫電改』飛行隊との死闘の対照記録であった。両氏が20年以上にわたって収集した、マル秘扱いを解除された米軍資料と、日米の生存者の証言を基に調査した成果であった。3月19日に関しては、当日の空母発艦機361機、うち来襲機355機分のほぼ完全な資料が集められていた。

筆者の調査範囲と完全に重なったものであった。本来なら、両氏の胸を借りたいところだが、「戦術、戦技」に関する不鮮明な箇所の校正に入っている筆者にはその余裕はなかった。生き残りの米捕虜の取材や貴重な証言もあったが、捕虜の調査は両氏の主目的ではない。28人目の問題のWilliam某氏については、新しい情報は得られなかった。

12. 「会」が収集した米パイロット「戦闘報告」450ページの解読と総括

2004年10月、呉戦災を記録する会の朝倉邦夫代表から『呉戦災——あれから60年』(『呉戦災』と略)を2005年7月に出版したい。国会図書館から収集した呉港に来襲した米パイロットの「戦闘報告」450ページを翻訳して欲しいと要請があった。皆さんはご承知のように、国会図書館関連の最近の英文資料のコピーには仕上がりが劣悪で判読困難なものがある。だが、一見すると、450ページのうち約350ページは3月19日付が主である。それに、筆者が収集していた「戦闘報告」にない新資料が50ページ近くも含まれているではないか。判読困難なものを、英文で書き直し(リライト)の上で和訳する困難を承知の上で、ありがたく協力を約束した。

しかも、普通1年以上かかると思われるものを4ヶ月以内に仕上げるようにとの難題で

ある。しかし、『呉戦災』のZ旗は高く掲げられている。筆者は自分が従来進めて来た調査の軸——「広島と呉の捕虜に関する情報」の吟味、「戦艦『大和』に関する未発表の情報や多くの誤報」の指摘や、「広島原爆と広島のコントロール・シティとしての呉の爆撃」の確認など——従来の調査の切り口どおりに資料を集約してもよいことを再確認した。朝倉氏も助力は惜しまないとのことで、判読上の助言も種々いただいた。

また、呉沖海空戦というものの、これは四国、瀬戸内諸島、広、広島、岩国を含む広範囲な海空戦である。この全域にわたる本邦初公開の米偵察機による多数の米公文書館写真を、工藤洋三氏を通じて入手していただいた。

13. 会が収集した米パイロットの「戦闘報告」などを集約した「呉の捕虜」に関する成果

予定より2ヶ月遅れで、校了にこぎつけ、間に合った。集約した仕事のうち、「呉の捕虜」に関する「戦闘報告」(350ページ)の成果が二表にまとまった。

表の名簿のNo.6とNo.7は、3月19日に広島湾で『大和』を攻撃した生証人である。3月19日に、呉湾で『大和』が襲われたという説は、福井静夫氏の『終戦と帝国海軍』(1961年)に始まって、戦記専門誌の『丸スペシャル52』(1981年)に引き継がれ、原勝洋氏の『伝承・戦艦大和』(1993年)などにも見られる。戦後、米機による『大和』の広島湾攻撃は日本では認められていなかったのだ。

この誤りは、3月28日に『大和』が呉湾内に在泊したときのB-29の偵察写真を3月19日と日本の研究家が誤認したためであった(『呉戦災』に筆者が発表)。実は、ニミッツも『大和』攻撃の報を喜んだあまり、呉湾で攻撃したという誤報の「戦闘報告」をうのみに公表した経緯があった。戦後、日本側がこの誤った情報にとびついたのかも知れない。

No.14は、『Genda's Blade』では「戦死扱い」。筆者の「捕虜扱い」が正しいことは呉監獄入出所記録が証明した。

No.16, 17, 18は、6月22日に呉工廠を爆撃したB-29の1機。11人の乗組員は高知市で撃墜されたが、うち3人は高知憲兵隊から呉監獄に送られ、7月1/2日の呉市街地爆撃で監獄の全焼に合うが救助された。一方、5月5日に広空廠を爆撃したB-29の1機は、高野山近くの竜神村で撃墜、11人の乗組員全員が中部軍に処刑されている。呉監獄に回されたかどうかで運命が岐れている。最近、呉監獄は捕虜を厚遇したので捕虜は帰国できたという主張がある。呉監獄「厚遇説」である(以後「厚遇説」と略)。

墜落時負傷して入所したNo.11のマコーミックは、治療のため拘留が長期になり、B-29の3人と7月1/2日に被爆したが救助された。退所時には、親身の長期治療を泣いて軍医に感謝したと監獄副長が報告で強調している。「厚遇説」も、この報告による。また、捕虜は普通拘留中に敵に厚遇を受けたことは帰国後報告しない(『Genda's Blade』に例証)。それを最近の「厚遇説」はおかまいなしだ。「No.28のエーベルは、拘留中に親切にされたので、カートライトを通じて、監獄長に感謝したい意向があった」などと自説の評点かせぎに余念がない。他の情報によれば、大船で毎日殴られていたというエーベルは、呉が大船よりヤワだったと言ったのかも知れないが、厚遇説の森重昭氏に同調する広島の新新聞報道まで現われた(読売新聞広島2006年2月2日)。「厚遇説」に異を唱える筆者を森氏と同意見だときめつける始末であった(読売同日付)。大船収容所の捕虜の取扱いは、呉から送られてきた捕虜にも厳しかった。役に立つ情報を吐く者は別だが、それ以外の者は、三食のメシも牢名主ではなく、収容所から取り上げられた。厚遇のおかげで帰国できたと言え

呉海軍監獄に収監された米飛行士 一覧(二) 一九四五年六月二八日～八月九日関係

No.		階級		資格		所属母艦		隊名		報告 No		撃墜状況		海軍刑務所入出		移動後		摘要			
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14							
ウイリアム・E・エーベル	ルーサー・H・ジョンソン	ジョージ・F・ラムリル	オリバー・I・ホーン	ジョセフ・G・コステガン	ウォーレンス・E・コリンズ	ガーランド・トラッセル	フランクリン・B・ミラー	ロバート・F・ハナ	リチャード・W・マン	ジョン・ムーア	スタンリー・V・ビートリアン	アーヴィン・アインシュタイン	ユージン・J・トーガス	チャールズ・Jリチャードソン	収監飛行士氏名						
機銃士	パイロット	通信士	三等機銃士	大尉	三等機銃士	中尉	二等機銃士	二等機銃士	中尉				中尉	二等機銃士	資格						
第七航空群 読谷	ベニントン	ベニントン	レキシントン	レキシントン	レキシントン	ランドルフ	ランドルフ	シャングリラ	シャングリラ	爆撃軍 第二十一 爆撃軍	爆撃軍 第二十一 爆撃軍	爆撃軍 第二十一 爆撃軍	エセックス	エセックス	所属母艦						
戦隊 第八六六	第四九四 B24爆撃群	V B-1	94 CAG	V B-94	V B-94	V B-16	V B-16			爆撃団 B29第五八	爆撃団 B29第五八	爆撃団 B29第五八	V B F-83	V B-83	隊名						
7/30 MIS報告	7/24 不明	7/28 七五	8/2 九四一六	8/2 九四一六	9/16 四〇一四五	9/16 四〇一四五	8/15 空母戦闘報告	8/15 空母戦闘報告		T M 215	T M 215	T M 215	83 C V G	83 C V G	報告 No						
A A	日向 A A	伊勢 A A	A A	A A						呉・高知 A A	呉・高知 A A	呉・高知 A A	伊勢・日向 A A	伊勢・日向 A A	交戦	対空砲火					
7/28	7/24	7/28	7/28	7/28	7/24	7/28	7/24	7/24	7/24	6/22	6/22	6/22	3/19	3/19	月日						
山口県	音戸町	東能美町	呉港上空	呉港上空	呉港	情島上空	情島上空	上空	西能美島	高知市	高知市	高知市	呉港	呉港	場所						
8/9	8/4	7/30	7/31	7/30	7/30	7/29	7/29	7/25	7/25	6/28	6/28	6/28	3/20	3/21	入獄						
8/17	8/17	8/1	8/1	8/1	8/1	8/1	8/1	7/27	7/27	7/9	7/9	7/9	5/11	5/11	出所						
八	一三	二	一	二	三	三	二	二	二二	一一	一一	一一	五二	五一	日数						
9/1 大船送り	8/17 大船送り														解放	移動後					
西部復員監部搭乗員 リストより宇吹資料	西部復員監部搭乗員 リストより宇吹資料									7/22 呉工廠爆撃帰路 呉監獄で被爆路	6/22 呉工廠爆撃帰路 呉監獄で被爆路	7/22 呉工廠爆撃帰路 呉監獄で被爆路	6/22 呉工廠爆撃帰路 呉監獄で被爆路	では戦死扱いになっている	Genda's Blade	摘要					

呉海軍監獄に収監された米飛行士一覽(一)一九四五年三月一九日関係														
No.	収監飛行士氏名													
	階級	資格	所属母艦	隊名	報告No	交戦	撃墜	状況	海軍刑務所入出	移動後	摘要			
13	エドウィン・W・マッシュューズ	大尉	ホーネット	VBF	三七	撃墜		3/19	松山上空	3/21	5/11	五一	捕虜解放 第一号	
12	テャールズ・F・ワイズ	大尉	ホーネット	VBF	三七	撃墜		3/19	松山上空	3/21	3/24	三		
11	フォレス・E・マコーミック	中尉	ホーネットか	VBF	三七	撃墜		3/19	松山上空	3/21	7/9	一一〇		呉監獄で被爆 7/1
10	ウィリアム「文字不鮮明」		イントレピッド	不明	不明					3/20	4/20	十三		
9	ハロルド・R・アイヤー	少尉	ワズプ	VBF	不明			3/19	呉港	3/20	5/11	五二		
8	ジョン・D・ウエルシュ	中尉	バーガーヒル	VBF	一二		金剛クラス	3/19	呉港	3/19	3/24	五		
7	クリフォード・A・ブラウン	三等通信士	ベニントン	VBF	一五		大和	3/19	広島湾	3/19	3/24	五		柱島泊地
6	ドナルド・ドリス・ウォードン	大尉	ベニントン	VMF	一五		大和	3/19	広島湾	3/19	5/11	五三		柱島泊地
5	ハロルド・W・ウエスト	三等機銃士	ホーネット	VTF	一二		伊勢クラス	3/19	呉港	3/19	5/11	五三		
4	タルマッジ・ウエストモーランド	中尉	ホーネット	VTF	一二		伊勢クラス	3/19	呉港	3/19	3/24	五		
3	ロバート・H・ウィリアムズ	二等通信士	ホーネット	VTF	一二		伊勢クラス	3/19	呉港	3/19	5/11	五三		
2	クロフォード・H・バーネット	三等通信士	イントレピッド	VBF	一〇		伊勢クラス	3/19	呉港	3/19	5/11	五三		
1	ロバート・プリニック	少尉	イントレピッド	VBF	一〇		伊勢クラス	3/19	呉港	3/19	3/24	五		

るような状況ではなかったようだ(C. マーシャル『B-29 日本爆撃 30 回の実録』2001 年)。

14. カートライト氏の回顧録『ロンサム・レディとのデート——帰ってきた広島捕虜』

2002 年、3 度目の広島訪問を終えて帰国したカーライト(B-24『ロンサム・レディ』のパイロット)は、広島生き残りの一捕虜として、回顧録を出版した。

1978 年に中国新聞と英文毎日には「広島捕虜の行方」を総括して、これ以上は生き残った広島捕虜に訊くのが真相解明のキイだとむすんでいるが、このキイパーソンがカーライト氏である。

カーライト氏の回顧録は、生き残った自分とエーベル以外の 18 人の「広島捕虜の行方」について詳しい消息を知らせて、キイパーソンの役を果たしてくれた。

2004 年 7 月 30 日付の朝日新聞広島は、「部下の米兵 被爆死」「原爆 決して許せぬ」のタイトルで、カーライト氏が回顧録に述べた「自軍にたいする心境告白」を紹介した。また、大船で生き残った呉の捕虜と同じように、「原爆投下が疑いなく私の生命を救った」と記したことを紹介した。森 重昭氏は NHK 広島支局の支援を受けて、これを和訳出版(2004 年)されたが、NHK の自動翻訳機の誤作用か、朝日も指摘した広島捕虜でありながら、生き残った自分の運命と、部下の運命の明暗を分けたものが何かを自問された箇所が、一部やや混乱か(原著 p69 の 9 行)、一部欠落(原著 p76, 77 の 13 行)して、カーライト氏の心境が十分に伝わっていないのは残念である。

15. 原爆投下と同じ方法で 16. 681 発のナパーム弾に爆撃された呉の捕虜は全員帰国

標的評価統合集団は呉の捕虜について次のように戦後記録している：

「呉の捕虜は撃墜され、呉監獄に拘留された。捕虜は、7 月 1 / 2 日の空襲も生き延びて、戦後全員帰国した。この空襲は 141 機の B-29(ナパーム焼夷弾 16. 681 発)による呉の「焼夷弾に一番弱い地帯」を爆撃部隊が「最大の努力」目標にしたものであった。この地帯に呉監獄は近接していた。この爆撃は、広島「爆撃に一番弱い地帯」を目標にした原爆と同じ方法で行われた」と。広島と呉の「NO. 1 ファイア・ゾーン(爆撃に一番弱い地帯)」のマップを併記した同集団は、これが、呉地区目標のファイルであるため、広島捕虜の原爆死には触れていない。

ただ、ナパーム焼夷弾 16. 681 発の「最大の努力」をもってしても、呉の捕虜が生き延びて全員帰国したことを 1945 年に強調している。このことによっても、呉の捕虜は被爆したのが原爆でなく、ナパーム弾であったため帰国できたと 2006 年の今明言できる。

(呉戦災を記録する会)